

近代中国における日本書籍の翻訳と紹介

—19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴—

張 迪

キーワード 翻訳書、近代中日、変法維新、時代の需要

一、はじめに

翻訳は長期間にわたって、社会的コミュニケーションの手段の一つとしての役割を果たしてきた。翻訳を介して、異なる社会の文化は互いに影響しあいながら、発展してきたのである。他方、翻訳それ自体は時代や社会背景と密接な関係があり、その時代の影響を受け、歴史を反映し、それぞれ異なる特徴を呈する。

西洋列強の進出を受けた中国では、列強に抵抗しつつも近代西洋の学問を取り入れる一環として、翻訳が重要な役割を果たした。

1840年のアヘン戦争以後、西洋の大砲と軍艦の威力に驚いた中国人は、西洋列強の侵略に抵抗しつつ、西洋学問を取り入れることを始めた。この時期、魏源の『海国図志』（1847年）、徐繼畬の『瀛環志略』（1848年）など、世界各国の歴史・地理を主な翻訳対象とする訳著が多かった。

19世紀の60年代から90年代まで、中国では清政府の曾国藩、李鴻章、張之洞らの洋務派官僚により洋務運動が起こった。洋務派の人々は、積極的に欧米の科学技術を摂取し、軍艦や鉄砲を作る官営軍事工場や外国語学校を設立したり、海外に留学生を派遣したり、また西洋の科学書を翻訳させたりした。しかし、洋務運動はただ表面的に近代科学・技術を受け入れようとしたに過ぎず、近代科学・技術の根底にある哲学思想や政治制度などについては、まったく翻訳されなかった。

1895年日清戦争の敗北が契機となり、中国人は、国内の政治や教育などの近代的改革を経て勃興した日本に目を向けるようになった。こうした背景のもと、日本からの翻訳が急速に増え、1896年日清戦争の直後から1911年の辛亥革命に至るまで、中国では、第一期の日本書翻訳ブームが出現した。

当時、清政府は、西洋と日本の新思想や新知識を求めため、1896年から大量の留学生を日本に送り込んだ。1901年前後になると、留学生たちにも翻訳能

力が身に付き、東京で日本語翻訳の団体も結成され、やがて雑誌や単行書を翻訳出版するに至った。一方、当時の中国国内でも、北京と上海をはじめ、中国各地に新聞社、訳書局や日本語学校が盛んに設けられ、中国に滞在する日本人や日本語学校の卒業生たちにより、大規模な日本語書籍の翻訳作業が行われた。例えば、1896年から1911年までのわずか15年の間に、中国で翻訳出版された日本語書籍は、実に958種類にも達した。¹⁾また、翻訳書の内容としては、社会科学をはじめ、世界の歴史地理や自然科学、応用科学、文学など幅広く訳された。

本論はこの時代の中国で行われた翻訳活動を研究対象として、それが如何に出現し、また如何に展開されていったかに焦点を絞って考察したい。それを通して、近代中国における日本語の翻訳ブームとその背景、翻訳作業の主体、ならびにそれに影響を与えた様々な要因や条件を明らかにしたいと思う。

二、19世紀末から20世紀初頭の中国における日本語翻訳ブーム

1840年アヘン戦争以後、中国人は日本よりも欧米の近代文明に目を向けたため、翻訳した日本語の数はわずかであった。しかし、日清戦争によって、その状況は一変した。

日清戦争の敗北は中国の朝野上下に大きな衝撃を与えた。なぜ東洋の小さな島国である日本が中国に勝つことができたのか、この問題を考えることを通して、多くの中国人は日本に目を向け、そして日本に対する認識を改めるとともに、改革の方法を日本に求めるようになった。このような背景の下、中国における初めての日本語翻訳ブームがやってきたのである。

1、維新派による日本語翻訳の提唱

「中体西用」²⁾を主張した洋務運動では、清政府を立て直すことができなかった。清仏戦争（1884-85年）と日清戦争（1894-95年）の敗北に伴ない、一部の進歩的知識人たちは、国家の強さは単に近代的な兵器や軍艦のみにあるのではなく、国家体制にあることに気付いた。

1898年、明治維新の影響と日清戦争の刺激によって、中国では「変法維新運動」が起こった。「変法維新」は、旧法（伝統的社会体制）を变革し、新法（新しい社会体制）を実施するということであり、変法維新運動は、社会改良運動のみならず、思想啓蒙運動としても、中国近代史において重要な地位を占めている。康有為（1858-1927年）や梁啓超（1873-1929年）などの知識人をリーダーとする維新派は、「変法自強」の策を上奏し、日本の明治維新を手本とし、

上から下への変法維新のやり方によって、王朝体制を保ちつつ立憲君主制に移行し、政治、教育、経済などの社会制度の全面的改革を目指し、中国を亡国の危機から救い、中国に資本主義への道を歩ませようとした。

また、中国人の学習者にとって日本語は学びやすいというだけでなく、西学の有用書は日本にほとんど訳本があり、日本書を読むことを通じて西学を研究するほうがより速いとする認識は、当時の維新派において共通のものとなっていた。このような背景の下、日本にならう重要な方法の一つとして、この時期、日本書が盛んに翻訳されるようになったのである。

変法維新を宣伝するため、康有為の弟子梁啓超は汪康年、黄遵憲らとともに1896年7月上海に新聞『時務報』を創刊した。『時務報』は当時、変法維新運動の機関誌的な役割を果たし、盛んに変法自強の主義を宣伝した。1896-98年、『時務報』には「東文報訳」の欄が設けられ、日本人古城貞吉は日本の新聞、雑誌記事、諸規則および書籍の翻訳を担当した。主筆に任じられた梁啓超は、『時務報』第27冊（1897年5月）、第29冊（1897年6月）、第33冊（1897年7月）の三回に分けて、「訳書論」を連載し、日本書の翻訳事業の重要性と必要性を説いた。1898年、『時務報』は政府の機関紙に改められ、その翻訳局が政府監督下の民営事業となった。

1897年、康有為・梁啓超らは上海で大同訳書局を創設し、積極的に日本書の翻訳に取り組んだ。『大同訳書局叙例』において梁啓超は「変法のためには新法の書が必要であるが、西洋の語を学び西洋の書物を訳せば、急場に間に合わないため、東文（日本語）を主とし、西文を以て輔（たす）ける」と宣言している。

さらに、日本書翻訳の提唱者の中には、維新派と政治的立場が異なる洋務派の官僚張之洞や李鴻章などの名も見られた。1898年、湖広総督の張之洞は『勸学篇』を発表したが、この書は内篇、外篇、合わせて二十四篇からなっている。その中の「広訳」には、日本書を翻訳する利点を挙げている。この点から見れば、日本書の翻訳を奨励する点においては、当時の維新派や知識人のみでなく、進歩的な官僚とも一致した認識となっていたことがわかる。

ところで、維新派が日本にならって行った変法維新運動は、強大な封建保守勢力の利益と衝突したため、激しい攻撃を受けて、ついに失敗に終わった。しかし、変法維新運動は失敗に終わったが、維新派が積極的に日本と西欧の政治制度を紹介し、盛んに近代思想の啓蒙活動を行ったことを通して、多くの青年に民主革命の道を歩ませることとなった。

変法維新運動の失敗以降、康有為・梁啓超らは日本に亡命せざるを得なかった。維新派の人々も、彼らのあとをしたって、日本にやって来た。これらの

人々は、留学生として日本の学校に学びながら、梁啓超を助けて政治運動を行った。梁啓超は日本で『清議報』、ついで『新民叢報』、『新小説』などの雑誌を発行し、盛んに日本と欧米の学説を翻訳・紹介し、中国国内に送った。梁啓超の支持者は、留学生界にも中国国内にも、非常に多かったため、これらの翻訳書は当時の中国に大きな影響を与えた。

2、各地東文学堂の開設

日清戦争以後、中国国内での日本をモデルとする維新改革の気運の高まりにしたがい、人材育成は当時の急務となり、北京と上海をはじめ、各地に「東文学堂」という日本語学校が盛んに設けられ、日本書翻訳事業に取りかかれる人材の育成に着手した。のちに、これらの東文学堂の卒業生たちは、日本書翻訳の訳者になり、19世紀末20世紀初頭の中国における日本書翻訳活動の中に重要な役割を果たした。一方、東文学堂に招聘された日本人教師たちは日本語および他の基礎科目を教えながら、翻訳や訳書の校正なども担当した。例えば、藤田豊八訳『物理学』、古城貞吉訳『日本学校章程三種』、鈴木虎雄訳『経済学要義』などである。

これらの東文学堂の中で、その最初のもので、1897年に羅振玉が中心になって創設された上海東文学社である。上海東文学社は1900年に閉鎖されるまで、数多くの日本語翻訳者の人材を育成した。学社の設立の動機としては、「東文学社社章」に、著書や新聞を翻訳する場合、たびたび遠くから翻訳者を招かなければならないことなど、三点が挙げられている。³³ 卒業生の進路については、当社の教師や翻訳者として採用するほか、他の新聞社に推薦することなどであった。

当時、上海東文学社内には教師として日本学者の藤田豊八と田岡佐代治の二名がいた。その内、藤田豊八は上海東文学社で日本語教師を担当しながら、羅振玉が主宰した『農学报』の翻訳をも兼任した。『農学报』は1897年5月に上海で創刊、内容的には日本の農学研究書や農学関係論文および日本の各種新聞雑誌に掲載された農業関係記事の翻訳が多い。藤田豊八は、深い漢学の造詣を持っていた東洋史学者であり、中国の日本書籍の翻訳に大きな貢献をした。19世紀末の中国には「格致」という名称が「物理」に取って代わられるようになったのは、1900年に藤田豊八が飯盛挺造編著の『物理学』を同名の中国語版に翻訳し紹介したことに始まると言われている。

3、梁啓超の日本書翻訳への貢献

先にも述べた通り、1898年変法維新運動が失敗した後、康有為・梁啓超らは

日本に亡命せざるを得なかった。のちに、維新派の人々も、康有為・梁啓超らのあとをしたって、日本に来了。これらの人々は、留学生として日本の学校に学びながら、また梁啓超を助けて政治運動を行った。

日本に亡命して来た梁啓超は、1898年から1912年までの14年間に、日本語の学習と日本書の翻訳を提唱し、自ら『佳人之奇遇』、『経国美談』を翻訳した後、『清議報』(1898年)に続けて、さらに1902年には『新民叢報』と文芸誌『新小説』をも創刊した。

梁啓超は日本で『清議報』、『新民叢報』、『新小説』などの新聞・雑誌の創刊・発行を通して、福沢諭吉、加藤弘之をはじめ、ギリシアの古典学術、イギリスの経済学説、フランスの民主政治理論、ドイツの哲学思想など、幅広く日本と欧米の学説や思想を翻訳・紹介し、中国国内に送った。梁啓超の支持者は、留学生界にも中国国内にも、非常に多かったため、これらの翻訳書は当時の中国に大きな影響を与えた。

日本に亡命した直後の1898年11月、梁啓超は『清議報』を横浜で創刊した。『清議報』の内容については、梁啓超の政論、外国の論説、中国の時事、世界各国の現状、中国の哲学および政治小説『佳人之奇遇』、『経国美談』の連載など、大体六つの部分に分けられる。^{iv}

1899年2月の『清議報』第1冊において、梁啓超は「論学日本文之益(日本文を学ぶの益を論ず)」という文章を発表し、次のように指摘している。つまり、中国では近代以来の翻訳書は主に軍事や技術関係に偏っていて、それらの学問は専門的かつ複雑で、専念して勉強しなければ名をあげることができないし、社会意識の開化にはあまり役立たない。それに対して、日本では明治維新以降、政治や経済、哲学、社会学などの西洋思想や社会制度に関する翻訳書が多くて詳しい。日本の翻訳書は西洋学問をすべて、間違いなく訳したというわけではない。しかし、日本語と中国語とでは、同じ漢字を使って学習しやすいので、日本書から重訳するほうがはるかに早い。したがって、日本書を読めば、「日本之学、已尽為我有矣(日本の学問は悉く我がものになる)」と日本書を翻訳し読むことを中国人に勧めている。

4、政治小説をはじめとする日本文学の翻訳

変法維新運動の失敗を通して、梁啓超らは、よりいっそう中国で社会改革を実現するためには、民衆に対する思想啓蒙と革命宣伝が欠かせないことを痛感した。特に、民衆に対する思想啓蒙のために、文学の重要性と必要性をしみじみと感じ、文学翻訳の実践を始めたのである。政治小説をはじめ、科学冒険小説、探偵小説、軍事小説など、次々と中国に翻訳・紹介された。

中国における日本政治小説の翻訳は、1898年梁啓超訳の『佳人之奇遇』が『清議報』の創刊号に載ったことに始まった。同時に、梁啓超は『清議報』の創刊号に、最初の政治小説論となる「訳印政治小説序」をも発表した。この論説の中で、彼は西洋や日本で政治小説が政治改革の手段として、大きな役に立った事実を挙げ、政治小説の重要性を強調し、民衆への政治的思想啓蒙を目的とする政治小説を翻訳することを主張した。『佳人之奇遇』の後、梁啓超はまた『経国美談』も翻訳し、『清議報』に連載した。両作品は『清議報』の創刊号から69号まで引き続いて連載され、『清議報』の重要な内容の一部となっている。1902年に至ると、梁啓超は中国最初の小説専門誌『新小説』を創刊し、また、その創刊号に論説「小説と政治の関係を論ず」を掲げ、小説の思想啓蒙の意義と重要性を強調し、さらに、「小説界革命」を提唱した。のちに、梁啓超の提唱と国内の改革によって、数多くの西洋と日本の政治小説が翻訳され、近代中国における翻訳政治小説の隆盛期を迎えたのである。

政治小説と同時に、日本近代文学の他の題材の小説、例えば、科学冒険小説、探偵小説、軍事小説などの新しい種類の小説も中国語に翻訳された。しかし、19世紀末から20世紀初頭の中国における日本の小説の翻訳は、政治小説と大衆文学作品が大半を占め、日本近代文学を代表する文学者の作品はほとんど翻訳されていないのである。この点から見れば、当時、文学の翻訳がまだ未熟な状況にあったことがわかる一方、文学作品の翻訳に際し、文学の芸術性より、その政治性と大衆性がさらに重視されたことが明らかである。要するに、翻訳小説を通して、民衆に対する思想啓蒙を実現し、国家を亡国の危機から救うというのが、この時期の日本文学翻訳の第一の目的だったのである。

5、留学生の日本書翻訳

19世紀末から20世紀の初頭、中国人による日本留学ブームが日増しに熱くなった。中国国内では日本書の翻訳ブームが起きていたのと同時に、留学生たちも日本で滞在中、翻訳団体を創り、日本および欧米の思想・学問を紹介し、日本書の翻訳に積極的に取り組んでいた。これらの翻訳は、日本または中国国内で出版されており、当時の中国社会に大きな影響を与えた。

日清戦争以降、日本を手本とする変法維新の気運の高まりに連れて、日本への留学も提唱されるようになった。19世紀末、清政府が欧米へ派遣した留学生はほとんど理学・工学・軍事関係の科目を学んだが、20世紀初頭の留日学生の専攻は非常に幅広く、政治・法律・経済・文学・歴史・外国語・教育・軍事・理工・農業・医学・商業・音楽・美術・体育などのいろいろな科目にわたっている。その中では文科系に学ぶ者が多く、特に政治、法律と軍事は最も人気がある。

高かった。

留学生によって編集された刊行物の種類は多く、内容も形式も新しい。また、その多くは革命を主張し、近代中国の思想啓蒙に大きく役立った。

1900年に東京で創った訳書彙編社は留学生たちの最初の翻訳団体であり、創刊された月刊誌『訳書彙編』は留学生たちが初めて編集した雑誌である。『訳書彙編』の主な内容は、18、19世紀の欧米および日本の社会政治学説を翻訳することを中心とし、西洋諸国の著書もほとんど日本語からの重訳であった。訳書彙編社は「訳書彙編」を発行するとともに、そこに載った政治・法律・経済・歴史・地理関係の訳文を編集して、多くの単行本を刊行した。

早稲田大学の留学生たちは『早稲田大学の中国留日法政理財科講義』という早稲田大学の法律・政治・理工・経済科などの講義を翻訳し、早稲田大学から出版された。のちほど上海の商務印書館により中国国内で印刷・出版されたが、発行部数が非常に多く、それを教科書あるいは参考書として採用した中国の大学は多かったようである。

一方、訳書彙編社のメンバーの一人であった陸世芬は教科書訳輯社という翻訳団体を設け、日本の中学校の教科書を編訳し、中国国内の中学校に教科書の手本を送っていた。訳者はすべて留学生で、訳された教科書はほとんど中学校の全科目にわたっていた。彼らは中国近代教育事業に大きな貢献をしたのである。

それ以外にも、『普通百科全書』などを出版した上海の帰国留学生の翻訳団体である会文学社、湖南籍の留学生によって創られた湖南編訳社、福建省の留学生の翻訳団体の閩学会や江蘇省と浙江省の留学生を中心とする国学社など、数多くの留学生の翻訳団体がこの時期に創立された。

これらの留学生の翻訳団体の刊行物は、その大部分が、東京、横浜と神戸の印刷所で編集、印刷、出版され、中国に送られたのである。また、この頃、富山房や三省堂などの日本の出版社でも、日本書漢訳本の洋製本を中国向けに出版することを始めた。一方、中国国内では、日清戦争以後、日本書の漢訳本を大量に出した中国の出版社も、また盛んに留学生の訳書を出版するようになった。例えば、広智書局、教育世界出版社、文明書局、作新社などがそれである。中国では最大の出版社、商務印書館も数多くの翻訳書を出版した。

当時、留学生によって翻訳された書籍は政治、経済、哲学、宗教、法律、歴史、地理、産業、医学、軍事、文学、芸術など、社会科学と自然科学のほとんどあらゆる分野にわたっている。これらの翻訳・重訳書は当時の中国社会に大きな影響を与えた。1905年「清国留学生取締規則」などの一連の事件以後、大量の留学生が帰国し、20世紀初頭の中国人日本留学ブームがついに終わった。そ

れに伴って、日本翻訳書の主な刊行地も、東京から上海に切り替わっていくこととなった。

三、19世紀末から20世紀初頭の中国における日本書翻訳の内容概況

1、19世紀末から20世紀初頭の中国における日本書翻訳の種類と分布

維新派と留学生たちの努力によって、19世紀末から20世紀初頭にかけて翻訳された日本書は、数から見れば、当時中国で翻訳された外国書の中で圧倒的に多かった。

そして、訳書の種類と分布からみれば、近代初期と洋務運動の時期は、主に西洋書を翻訳した時期であり、自然科学と応用科学関係の書物が優位を占めていたが、1895年日清戦争以降、特に20世紀に入ると、その状況が一転し、主として日本書を翻訳する時期となり、社会科学、特に法律・政治・教育・軍事および歴史・地理関係の書物がその大半を占めている。

なお、『中国訳日本書総合目録』の統計によると、1896年から1911年までの間、中国訳日本書は合わせて958種類であるが、その内、総合類は8種類、哲学類は32種類、宗教類は6種類、自然科学類は83種類、応用科学類は89種類、社会科学類は366種類、中国歴史・地理類は63種類、世界歴史・地理類は175種類、言語類は133種類、美術類は3種類であった。つまり、社会科学と人文科学関係の訳書が合わせて778種類で、全体の81.2%を占めている。それに対して、自然科学と応用科学関係の訳書は合わせて172種類、わずか全体の18%であった。また、社会科学関係の訳書の内、法律類は98種類、政治類は96種類、教育類は76種類、軍事類は45種類であった。

2、19世紀末から20世紀初頭の中国における日本書翻訳ブームの特徴

19世紀末から20世紀初頭の中国における日本書の翻訳活動を考察することを通して、この時期の日本書翻訳ブームの特徴をいくつか明らかにすることができる。

まず第一に、日清戦争や変法維新運動などの時代背景と社会的な需要が、当時の翻訳対象および翻訳内容の選択に影響を与えたのである。

日清戦争以前、中国人は日本よりも欧米に目を向けていたため、翻訳の対象は主に西洋の書籍であり、翻訳した日本書の数はわずかなものに過ぎなかった。それが日清戦争の敗北に伴ない、ようやく多くの中国人が日本に目を向け、日本に対する認識に大きな変化が生じ、改革の手本を日本に求めるように

なった。こうして翻訳の対象も欧米から日本に変わってきたのである。

また、洋務運動の時期には、洋務派は封建支配体制を維持するために、もっぱら自然科学書と応用科学書を翻訳し、西洋近代の学問の根底にある哲学思想や政治制度などの社会科学については、まったく触れることがなかった。日清戦争の敗北を契機に、一部の進歩的知識人は、改革の中心問題が国家体制にあることに気付いた。さらに、変法維新運動による中国における思想啓蒙運動の勃興ならびに清政府の新政の実施や留学生の派遣などの政策に伴ない、翻訳の内容は自然科学書と応用科学書から社会科学、特に政治・法律・教育・軍事および歴史・地理関係の書物へと変化した。

また、当時の留学生の大半は政治・法律・軍事および教育を学んでいたので、当然のことながら、この方面の書物の翻訳が彼らの得意な分野になっていた。したがって、大量の政治・法律・軍事および各級学校教科書に関する日本書籍の翻訳が19世紀末から20世紀初頭における中国訳日本書の特色となっているのである。

第二に、この時期、翻訳作業に取りかかった訳者は、だいたい四つのタイプに分けられる。

まず、維新派と革命派の知識人である。日清戦争以降、変法維新または民主革命を宣伝するため、維新派と革命派の知識人たちは、中国各地で、新聞・雑誌を創刊したり、出版社を設けたりして、盛んに日本書の翻訳作業を行った。

次に、各地の東文学堂の学生たちである。1897年、京師同文館において「東文館」を増設してから、北京と上海をはじめ、中国各地に東文学堂が盛んに開設され、その卒業生の中から、日本書翻訳事業に取りかけられる優秀な人材が数多く現れた。

さらに、中国に滞在する日本人教師たちである。日本人教師たちは、各地の東文学堂で日本語および他の基礎科目を教えながら、翻訳や訳書の校正なども担当した。

最後に、大勢の滞日留学生たちである。1896年に13名の官費留学生が日本に派遣されて以来、19世紀末から20世紀初頭にかけて、大量の中国人が日本に留学してきた。留学生たちは日本での滞在中、翻訳団体を創り、日本書の翻訳に積極的に取り組んだ。これらの翻訳は、日本または中国国内で出版されており、当時の中国社会に大きな影響を与えた。

第三に、この時期の翻訳は、重訳や入門書が多く、生硬で誤訳が多く見られ、レベルとしてはまだ未熟な状況にあったのである。

この時期の日本書翻訳ブームの出現の背景には、日本経由で西洋文明を輸入するという中国人の切迫した要望があった。大量の日本書翻訳ということの主

要な目的は、欧米の近代思想や知識を日本を經由して中国に取り入れることであった。したがって、日本それ自身の文化よりも、西洋学問に関する重訳が圧倒的に多かった。この時期の日本書の翻訳は日本自身を学ぶためではなく、むしろ日本を西洋に学ぶ「窓」として、この「窓」を通して、西洋の思想・知識の受容を図ろうとしたのである。

また、この時期、西洋の社会・経済などの諸制度を輸入することよりも、各分野の一般の教養、入門書や小中学校の教科書が多く、専門的な理論書はほとんど見られなかった。

この時期、大量の日本書翻訳は日本と西洋の新知識・新文化・新思想を中国に導入し紹介した。しかし、梁啓超が指摘しているように、「みないわゆる『梁啓超式』の輸入で、組織もなければ選択もない、本末そなわず、学派の区別もわからぬありさまであって、ただ多ければよしとしたのである。社会もまたそれを歓迎した。おそらく、長年のあいだ災害地にあった民衆が、草の根、木の皮、凍りついた雀、腐った鼠でさえも大よろこびで満足し、よだれをたらしめてむさぼるようなものであったろう。消化が可能かどうかは問題でなく、まして、病気になるかどうかなどは、問題にもならなかった。また実際に、それに代替しうる衛生的な良品もない。」¹⁾、と言った有り様で、無原則な翻訳や誤訳なども多く、様々な問題を残してしまうことになった。

四、おわりに

19世紀末から20世紀初頭の中国における日本書の翻訳活動は近代中国の社会変革および政治、経済、軍事、文化、思想、科学、文学などの発展に大きな影響を与えた。中国近代の思想の啓蒙運動は欧米よりも日本に頼るところが大きかった。20世紀初頭、数多くの中国人が日本へ留学したこと、さらには大量の日本書翻訳を通じて、中国人は日本の新しい社会変化に刺激されながら大きな示唆を受け、近代化意識の移入、制度の改革を求めるようになった。また、漢訳日本書を通じて欧米諸国の進んだ科学技術と民主精神を学び、中国社会の進歩育成を促進した。

また、日本書の翻訳活動は日本と西洋の新知識・新文化・新思想を中国に輸入し紹介しただけでなく、中国の近代教育および印刷出版業の発展をも促進した。特に、この時期の日本語教科書の翻訳は中国の近代教育に与えた影響が大きかった。19世紀末から20世紀初頭の中国で出版された新式学校教科書の数から見ると、日本教科書の翻訳は西洋諸国からのものを断然圧している。

また、翻訳によって思想・技術などが伝えられるとともに、それに伴ない翻訳国の言語にも変化がもたらされる。特に漢字を共用する日中両国においては、それが甚だしい。訳書の浸透につれて、中国語の中に多くの日本語語彙が受容され、中国語の文体も変化し、現代中国語に大きな影響をもたらした。

近代の中国人は日本書を翻訳するに際し、大量の日本語の語彙を吸収し、中国語の語彙を豊かにした。統計によれば、現代中国語の中に借用されている日本語彙は、少なくとも八百語があるとされる。^{vi}

日本人が西洋の事物を漢語に訳すとき、その語順は、まったく中国語の文法の規則に従った。したがって、中国人はこれらの語彙を容易に理解できたのである。学術的な専門語をはじめ、西洋の事物を表す語彙もまた数多く中国語に受容されたが、その中には、日本人が漢字で音訳した外来語も含まれる。例えば、「混凝土」、「倶楽部」、「浪漫」など；また、日本人が外国語を意識した語彙もある、例えば、「出版」、「哲学」、「階級」、「主義」、「原子」、「近代化」、「唯物論」などである。また、「腺」、「癌」のように日本人によって作られた漢字も、大和言葉を漢字で書いた「立場」、「場合」、「打消」、「取締」などの語彙もぜんぶ中国語の中に紛れ込んでいった。

その中に、従来中国にあった語を利用して、日本で新しい意味に用いたものがある。例えば、「革命」は「革天命」で「天の命が革（あらた）まる」、つまり天が別人に天子を命じ、天命をうけた有徳者が暴君に代わって天子となるということで、上からの改革を指した。しかし、それを日本ではrevolutionの訳にあて、従来の被支配階級が支配階級から国家権力を奪い、暴力で社会組織を急激に変革する、ということになった；「経済」はもともと「経世済民」で「世を経（おさ）め民を済（すく）う」の略で、「政治」の意味であった。したがって、当時中国の学者の中には、これらの日本語彙を使うことに反対した人もいた。しかし、洪水のように流れ込んだこれらの語彙を拒むことはできず、その反対論者も、のちにはその語彙を自分の文章の中に使わなければならないようになったのである。

20世紀になると、日本のような立憲君主制にしようとする康有為・梁啓超を代表とする維新派とは違い、フランスのような革命を起こし、清朝を倒し、新しい民主共和制国家を創設しようとする孫文をはじめとする人たちが、いわゆる革命派は、やがて辛亥革命を成し遂げるに至る。

こうして1911年辛亥革命が勃発し、1912年中華民国が成立した。当時の中国では、社会体制にまで革命が起こったため、西洋文明を数多く輸入することがさらに必要となった。この背景の下、日本書が1937年までに1759種類ほど翻訳された。この時期においては、やはり社会科学関係の翻訳書がもっとも多く、

さらに専門的な理論書も徐々に増えるに至った。また、西洋学問に関する重訳もほとんど見られなくなって、日本自身の社会、経済、文学に関係する翻訳が急増した。それは西洋に対する理解が深まり、直接翻訳できるようになったからであったが、一方、日本を独立した国として重視し、日本自身についての研究が進んだことも明らかである。

それ以降の時期においては、日本の対華「二十一か条」要求の提出、1919年五四運動にしたがった反日運動の影響などから、さらには1937年日中戦争の全面開戦などによって、両国の関係は最悪の時代に突入していった。中国においての日本書翻訳も、日中両国が戦争状態に入るにつれて激減してしまったことは言うまでもない。

註

- i 『中国訳日本書総合目録』『日本訳中国書総合目録』 譚汝謙 香港中文大学出版社 1980年
- ii 洋務運動の中心となる思想「中学為体、西学為用（中国の学問を体となし、西洋の学問を用となす）」の略語。つまり、道德、政治、文学など中国の伝統的な学問や社会体制を保ちつつ、軍事、製造部門などでは、西洋の科学と技術を中心とする西洋の物質文明を導入し、学び取るということである。
- iii 原文は次の通りである。「因将来中東交渉之事必繁而通中文者甚少故；因訳書訳報動須遠聘故；中東人士語言不能相通将来遊歴交接種種不便故。」
- iv 『清議報』創刊号に載った「清議報叙例」による。
- v 『清代學術概論—中国のルネッサンス』 梁啓超著 小野和子訳注 平凡社 1974年
- vi 『中国人留学日本史稿』 実藤恵秀 日本図書センター 2005年

参考文献

- 『明治・大正の翻訳史』 吉武好孝 研究社 1959年
 『清代學術概論—中国のルネッサンス』 梁啓超著 小野和子訳注 平凡社 1974年
 『中国訳日本書総合目録』『日本訳中国書総合目録』 譚汝謙 香港中文大学出

版社 1980年

『中国留学生史談』 実藤恵秀 第一書房 1981年

『飲冰室合集』 梁啓超 中華書局 1989年

『中国近代期刊彙刊・清議報』 中華書局編輯部編 中華書局 1991年

『近代訳書目』 王韜・顧燮光 [ほか] 編 北京図書館出版社 2003年

『梁啓超年譜長編』 丁文江・趙豊田編 島田虔次編訳 岩波書店2004年

『中国人日本留学史稿』 実藤恵秀 日本図書センター 2005年